



9

80

70

60

9

8

7

1

9

6

5

2

8

4

3

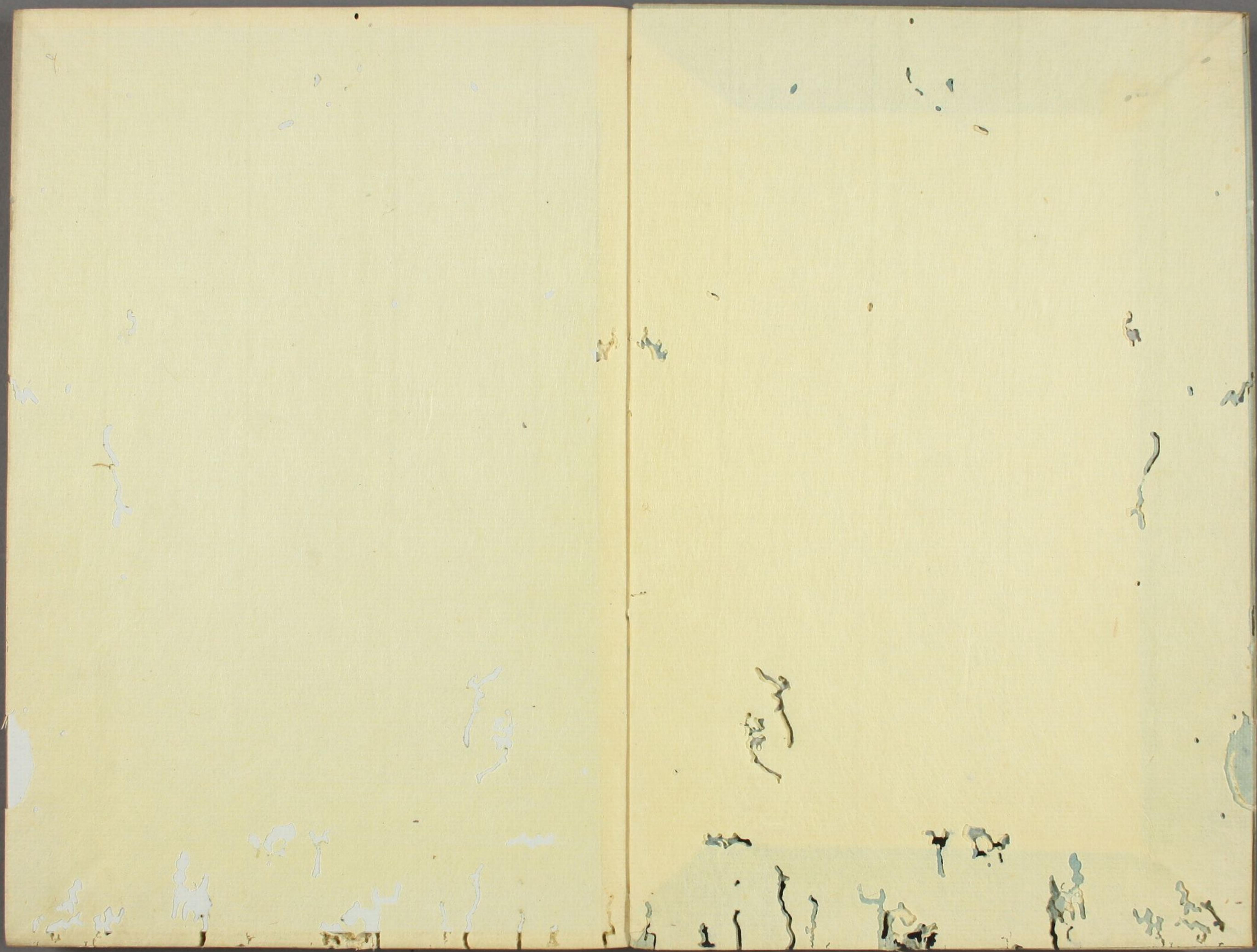
1

9

5

2

0



拾

拾

貫之集第一

七日内付の事

御文庫

延喜五年二月つゝとれ侍軍賀屋風のす
背せとあくらをめうづく

古 拾
夏山のけとあくらをめうづく
やうおれよく時をかうりせんの道をさんも立てゆる
延喜六年月の屏風ハ佑ふうのうた
軍立首歌うとれとくまう木角歌
のひあうづく

古 拾
ひてよしとまくがきなはうわのゆ
二月とれしきいきうゆうううう
ひのうのうかうふう山まか店のうのう

ゆくわきら

あくまうもむかしのいとく、がくのえを花はらひて
新物

三月四つすゑ

山あそ今しきははう花のかよは風よめやせん

わまわら

うらみのひじきのみのえよ草わらび人のまかの黒と

三月七つすゑ

花もれりわらわらしきよまくとて風のすゑ

五月とり

さ月ひまのまかにまのすやひまかとまくまく

六月うづ

萬葉のうきよはうもむかしのまかえり

みくわきら

見るまほのせんが衣ひゆかすははをしげ

七月七日

たまくわのまくわのまくわのまくわのまくわのまくわ

さまくわ

お風よかのまくわのまくわのまくわのまくわのまくわ

八月こぬじく

あくの用ひあくの用ひあくの用ひあくの用ひ

こまくわ

れの節よううれわらわらこまくわのまくわのまくわ

まくわ

娘の用ひあらもむとうちじれで黒とこもひだり
志頌のやまて

人ふれどもと風ひ是のゆふかよけかくう
あらじうけ

同上

十一月から

とおよきむろの脚もにゆわやひのまきてまつ
たはゆくめ

あれのまきとくとくやまゆひのゆん

アシのまく

友人のまく夜ゆまほきかけてゆきよす

十二月佛名

拾

とひうちよつとまう飛へゆきむじゆ白鳥ともよ處
延喜十三年十月内侍屏風のすうちのあ
せよとまう野よ人あまくあま麻林
まくまつるひま花房やふまく風のまく

ゆくねぐくとまく

木旁に立まくもよ厚のよくいまとまく

月夜うく衣うけとまく

あく衣うけまく月をよまくねぬ人まとまく

河内やくよお紫ある所

水庭よ郭うまひ紅葉の色もくや風まく

山
水
之
流
不
死

馬の毛を紅葉に見ゆ
人の馬よりてうれ
よやまみてはのうか
紙の毛けと毛の紙
追喜する年十二月
のうてりやんの紙

十五首

夏

日暮れにあはれてかひて絶え物と
さうすがまへるわざあああああや
伯のひわあまくいはよみくらべて
れ

かのじうにすつて秋のくらは鹿のくもす
さくまからくめり菊のれじとよののうひのん
吹風はうねすすみ草すむかにまくまよおのりん
延年する年のみいわんのゆ屏風のわう
らの音とふうてすまうとんかまくに
のりうよひうてあひきれあうる花をこす
そそひてかくまある

春

まくわは歌のくまひもれいじよもれあうとん
さんきもやまくはゆうてしれ
思ふとあうてせゆきまくらぬけよまくらう

人のまかやうやまとてくまくらの花まく
まくらは花まくらは波のこすりや然へまく
るり人のまくらはりやくらはくらは
静まくゆきまくへり全をつまくばれ秋のゆゆ
さんまやけきのねとひくとまく
花まくまくまく地とも柳乃にてまくまくまく
人かくよほくのれとんく
我宿のあまうふまく花まくとえまくめまく
地のまくまくまくのまくねよかれぬ
緑けらねよせらねまくとえまくまく花まく
延年する年十二月保志たと年とだなむか

古波奉五十贊時屏風和寄

秋高れねのますすすよし
鶴子子せのあうとうつも
れとのと見ひゝものとあらわす風の葉うもを

松

きじよきうふとおおけりよすくおとくれよすく
うくらぬだの山よすく風ふくの風えどいのよすく
れ草の風くらうめまかくめりけくめくらう

延喜十五年九月廿二日右侍内幸堅清和
のぞ官房恩承のつくまうたまひりうらさ

屏風新寄の首春

かくくわくとおほくのとせんの梅の梅うとまくすくまく

百うわくとくすくす梅花うれのまくまくわく
菊のもくくくはくひのひのあうきくはくれくはく
じきのくづくわくはくれくとくよくすくわくはくのけ
延喜十五年九月廿二日幸堅清和の筆
もく背せうけぬうて六首人歌うとまく
庵よそく梅花をとくよくまくわく
人のよかくとくよくてくうう梅の花とくよく
地のゆくよくとくよく花のゆくとくよく
花うけとくよく

卷之十七

故の祀をまよひやあれば、也乃むとて
きのうの事に人をさんか
されよめれあはるにあらじ
うるの事わねの間もあらわ

人の如きの所に
あらわす所

其の事は
常乃庵よみ
まづり

延祐十七年八月宣旨承之

人へゆきとくあらんゆのれすばね
拾

わがまつじがとくに思ふわきのあよ三かさん
鳥のゆきいきまつ柳のゆきゆのゆ
ねのゆたかてさけやのれすをのゆハ
人よあそ肩くはうたのも風からみゆす
ゆくのゆ立くはんほれらくとお
行くかとまくはくさくれみとおゆく
よせまくのゆとあれはね风よも
えのゆくゆくはりゆかのねうけちゆく
ゆくゆくはりゆかのねうけちゆく
あれゆくゆくはりゆかのねうけちゆく
えのゆくゆくはりゆかのねうけちゆく

近頃七年のをもつて此處の作序圖の
え元日

やくあれ
のうれし
ひるめに

まほすゑのれいね乃草あらえのまくは
たゆんのりとふとまわる
むほの道ふれまきとげまくとくに
あらうとやよしのうめいをくわらせ
まほすゑのれいね乃草あらえのまくは

ねのとくにゆき山風を此のとくや
せりよ花の花わふは

貫之集

貴之集
也來ましにうらやの身よひは波のうきよく
九月にこゆう
紅葉がわづれとおもむかふるやい室のひと
ことわふ

九月七日

金匱之集第ニ

迎春十八年二月五日のみせれりあけ乃
屏風のうちめにてきてまひる

山川風水
之謂也

柳の葉あれ、
風に吹かれ
て、

七月

秋の月夜
月の光
月の夕
月の夕
月の夕

八月

わまやまのゆふあまくとてのゆふ

九月

うれとう花とむらん月のありぬの月

十月

あれちねまめうかとての月

十一月

こだまの月あはせは宣代まうすての花

延暦十八年四月東宮内侍屏風

花のすゑ人よみがへ取 八首

白さうあさとさす梅花うるはれひて

池乃やうに前のもあさうと前

ゆまやくと立つて池乃前あめうてせら

そくへうやしら

けうううとあすとおのの花の花うたう

七月ひとけうる

天河あく君いやくもとくとくとくとく

れとこのとくとく花さんうる

あくえな花いとくとおののあくまうとくとく

うくとくとくとくとく

花のうくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

花のことをやまのとおもひたるくまのむら

ものあらこら

まらく城わらきのちうをかとおもひたるくまのむら

延喜八年正月敵は屏風のすやすら

トウテツモの歌十四首よりの花だけ

やうめ

物の花まちねむじめうこふすまの新をやん

まひととく麻原ともあり

まくまくまくまくまくまく金ハおき里のせう

ねよめれあづち

うのうぬあかゆあさゆ地とほえよのとめう前浪

人のまか聲小あくよそしろ

まあくゆあくゆの聲くれい草のあくよそあくゆ

ちゆきく

かくゆあくゆあくゆハ獨花うづか寛ゆあくゆ

かくゆあくゆのね

ねをのと見りてうづか寛ゆあくゆも絶行あくゆ

かくゆ

やあくゆは風うづか寛ゆあくゆ波の花うづか寛ゆあくゆ

人の家内池のあくゆねのまよあくゆ内

とときく

雨うづか寛ゆあくゆ池のみうづか寛ゆあくゆ

かくゆ

おとむじよしよくねの祀めうとやくす
花のまくあまくみゆきと人よきに神の下まえみみれ
さんまの家うよとこひづてまうきのるる
のすにそり

ひ風よまくよまくよまくよまくよまくよまくよまく
あつまわにこすにとんあらは風もみら乃
ちるよくはきそり

紅葉のねまむらむらおつれ西風ひめくゆふすれ
月乃めだらく

えうちぬねのねの月夜のうめく宿のうまくの風
石け人のね乃家かく

白ぬよ高めあらへやねあらのそらもやくゆふすれ
佛名乃あくふ道師のうらはにそよほ
たどりも夜よゆりて佛とぞらてあくよも
とたものううれふじやんそよ

しづの祀めうよくゆくの日月のうめの祀めよもあら
延喜十九年東宮乃ゆ屏風

一十六首三月の重ねよやうとくくまうり
せよ

春のよひよあまはまとひまよゆくゆくゆくまうり

月けくよくよくよくよくよくよくよくよくよくよくよく

おやまよあの祀もいよめれろ

故の祀りとひづからむまほねとくわゆるは

車にのまれんが御まくら

人もれうがてらるやうせのあれよあひき

六月五日

あみ草ねまきのうはなまくらの

六月五日

おぬきののり解とふあかくまきのねいもく

うになくはりとさけり

まきよわきよあらのまきのうはなまくらの

いたれどんじ

おぬきよへやうは祀すまくわもくらの

九月五日

おとこゑのどくも萬の祀人のよひれまくら

萬のく人のまくらもく

まくらにまくらあひねはくわくまくらのまくら

まくらのまくら

やまくらもくらのまくらはまくら秋そ神まくら

まくら

近々一年五月中宮の御屏風のわすせた

首わきまつてえ日しきのじ所

ゆうとうとうひまくはくせのまのとあらすじ

みのひ

りくわのねとくわにてきぐれぬあくまきとくわ

二月じゆの花死る所

山里ふきしむわく梅の花死つてさむかくわく

さうだもろ

わくわくせきとくまの風とびとくせん

三月やべふまぐる

わくのふとゆくひくとくとくのまのまん

と月つづりの月花死る所

うる紀のかよくわくにくまのおとくわく

うきとくとくとくとくとくとくとくとくとく

しきふのわくらん人ねくわく

けくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

人のあらうねのうれ

まよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

らむにくわくたせう郭とくとくとくとくとく

雨う田うるそろ

くわくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

六月すとんもる雨

夏衣うすきのひの船もとひまの下ぬかすねうえ

うへ

ふきにわぬぬう月にかくはりあらやの朝

せむすとさんざまくまくら

人をよみとあらてまのうはうけよねとくら

田のまの家ほわら

かくすと月と風と月と風と金とおまかん

い日とてのあはれとゆかりうる前

みまくらとやまととじやくらのうねる

角あらそひんねのゆくよにまくら

九月まつめくら

うかうかのねをと秋意がやまくら

何のめぐりにわあるとし

山ちよかわとくわの事のまくらとよくら

十月まくの月

うかうかのまくらとまくらと花と春やくら

十一月まくの月

うかうかのまくらとまくらとあやのまくらとまくら

十二月人ゆきとしと月と月

うかうかのまくらとまくらと梅と雪と月とまくらと月

延喜二年ひのうのあらわのまのまくら

書

三十首

ひのきの山の里にさへ行かうの心はかうとくうまき
ぬこのへ

吹風よあはれらひ浦のゆめがまくとおきとせり

あはれの山

旅とれすをのまにあはれのまゝにせんせん

かややま

かややまとさうじわらじまくはなはくはくはん

かややま

君うべのうれむとまくの深乃まことわらひくん

じわらひ

まくとにひよみくらうとてやよかく君はやまくさ

まくさ

たまひのゆきをまくまくまくまくまくまくまくまく

まくさ

まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まくさ

まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まくさ

まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まくさ

まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

トのや。

ナの吉野山を乃ゆきのつりて取り下
近長四年まで此處を草喰はる
の事納言ゆめせられ

吉野の山と稱すとあんたまもひまく
かうとうとくにせりてつづく

花見ねむるをへりとくにやつてせば身
花見うねむるをへりとくにやつてせば身

わらふまよおがくにまもむら梅のゆうりうけ
人のゆうきのゆうきのわらう

のつぶさんれのゆうのわらう

あつうめのまほくをせやうとおつれさく

人舟よみうて夜の花やうす

とんあもひきよにやうす

いそよからてのあくはれはくもあひぬけり

ねのゆうもつとのあれうす

あまの花もううす

いそよて植くらやとの花あれはくよとひえこくすり

じそくらぬよのうて人の花やうす

がくれくつゆよへひ壁へきやらうとて花を晴

あれよまの花のあうすとくす

御子れのよしひねはるをあらうとくわ
まくひもかしけふこと
きの花うへてもせあへとあひてよしはなあひ
けりの花ひはくわあひ
ウラ波よしひあすじとく君さん代のあくからん
さんあま乃みらひうよ取
うもよせりつまへおまとむうひうきれ
人の家よりもものうらへよちうひう
おまうめくわとまはいえくまくはえよちう
かくさくわう
是門の山ひきよせだらけよきゆう津のまなま

延長四年九月はきの御方十頃京うくの
やまとそひのつうすうすうおはなは風寒
う十一首力辭

またともあらことにあらめさせつしよあうり
ヨウムのうせとくのと居てあり代をきてすんう思
緋ひ

花みきのよしひねはるをあらうとくわ
ねよせれふこと
ねのあんがまうとくにたまくわあまくは
まくわ

よとくわあまんあらうとくわせぬわやまくは

れ風の音とあはれとよ波のうすき音を乞へうる
さけまくゆふらむのひきく波音よくうんやあはん
ほのじきわからぬ

がりみのうらのし鳥もよそぞのよひとあはれ
きく

いそれ君の音をとどめ花やうてあはれさんとせ
葉れもよそじ水を歌れまくにきみくおはなづか

まけ

年よりゆきよ行のよとくせぬはれとうえ
三葉なと月屏風乃

さうふれよけりふまゆのまきうせのよとせん
じとむりようう年あれ海の魚とせんわあく
まくらもよくねやかうのよ今ま（宮代よしゆ
ゆくよくよくとがくあひのひうのけりうこ鳥ふ
鳥の山の山の岩波乃くうくうけく人を尋
尋れ花よくくとがくくうくうくくくくく
浦とくうくう浪の花れを海よくまくくくく
梅乃れよくうくうくのわく人のても神かともよだるふ
うくうくうくうくうくうくうくうくうくうく
ゆくやくうくういたもがよくうくうくうくうく
まくうくまくのうくうくうくうくうくうく

はんどの人ともあらず朝や夜となく秋や春
のうをまづかうて見方ちゆるれもすゑ
年月れうもあててわらわざものねをうるを
久方乃月新月の那波をかねむりあつり
はえど今とあとこひて我の泥ちとあらわ
ゆき相とわきくあれあらぬよみじてあつれ
きのまきつまほ月の山の宮うゆうまほげ
君ゆきいはまもと吉野のようや山の宮うゆ

寶文集第三

近秋涼時内裏の屏風に就て六首元日

うそひそばく所

うそくあらととよ百年れまのくめと寫れあく
人のじめのあらと所

我宿るあらとみのく梅の花とすよわく時もほ

山色をうそくしとんがよれせくよくゆ

ひそめきく家のうそくゆうかう

野へすくぐもうとて我宿ふまの白やあらやむ
たよのやうめうとてやうめうとてやうめう

ゆうめうとてやうめう

西とすまくれあはれの花のまじりに
さかのれ

いはまくまくわくわくわくわくわくわく

まにまくらふらのまく

花の花あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

大神のまつらゆうてまつ

まつらゆうてまつらゆうてまつらゆうてまつ
ゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう

ゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

とんあとのほへまくら

まくらゆうてまくらゆうてまくらゆうてまくら

七月七日

まくらゆうてまくらゆうてまくらゆうてまくら

よかのまく

よかのまくらゆうてまくらゆうてまくらゆうてまくら

八月十五夜のまくらに人のまくらこまく

こまくらゆうてまくらゆうてまくらゆうてまくら

まくらゆうてまくらゆうてまくらゆうてまくら

おのまくらゆうてまくらゆうてまくらゆうてまくら

かのれゆづにつのよとすりあ
しきわづのゆめのれども秋月とよとさうて
そぞくさんて原

そぞくさんて原の秋月のれども秋月とよとさうて
みのれども秋月とよとさうて

そあねうらみうきの月のれども秋月とよとさうて
みのれども秋月とよとさうて

そあねうらみうきの月のれども秋月とよとさうて
みのれども秋月とよとさうて

まちまのあくまく秋月のれども秋月とよとさうて
くらあのかけゆくらひくら

竹とよとさうて原のれども秋月とよとさうて
すくはくとよとさうて

すくはくとよとさうて原のれども秋月とよとさうて
くらあのかけゆくらひくら

山里とよとさうて原のれども秋月とよとさうて
くらあのかけゆくらひくら

宮のやくねくまよ山に秋月ありと年々
近古六年中宮内所屏風のよとさうて右邊
右邊中持行持

わくはくとよとさうて原のれども秋月とよとさうて

郭云うく野う都とあはれづるてうるまくとて春とま
うくのねうきのねうきのねうきのねうきのねうき
またうきのねうきのねうきのねうきのねうきのねうき
京極の桜中納言の屏風乃ねのす木舟

去處うちやう時のよまかやうの梅とくわうの
秋月とよまかう梅とくわうの梅とくわうの

望くうとくわうとくわうとくわうとくわうとくわう
ゆうとくわうとくわうとくわうとくわうとくわう

木

七月日おもむくはよの花の花とよの花とよの花

夏

さ月うの通うよの花とよの花の花とよの花とよの花

木

アヤモトウツカヒアヤモトウツカヒアヤモトウツカヒ
セタハシヤモトウツカヒアヤモトウツカヒアヤモトウツカヒ
姉うけろ雪とあら月とあら月とあら月とあら月とあら月
アラ月とあら月とあら月とあら月とあら月とあら月とあら月
アラ月とあら月とあら月とあら月とあら月とあら月とあら月
アラ月とあら月とあら月とあら月とあら月とあら月とあら月

アラ月とあら月とあら月とあら月とあら月とあら月とあら月

冬

おまくらひうらとおまきとおまくらひうらすて時角ノれ
おりうらのあるく時角白波のうち行ハシ名もそがつるすれ
白波ふゆりくとれて梅の花人ハナヒトとて匂ハラフすれ
ひくせようもゆめめの梅のふまはくすわふまうくす

延長十年十月十日女八宮ハクミやせせの渡ワタリの内
この軍アーリはくまう時の屏風カニシキでうせ

せあくよお月せよてつうよつう

冬をもむらんそや梅の花ハナまびわくもほうめくしん
いととのとだちもよつま柳シダレのゆどあきまくとれ
獨ハタチわぬきう花ハナうなまかわくとれ

故乃花ハナきさわらとて郭カマツをゆさみぬくまかくとて
あけの花ハナきさわらとて夏草カマツのゆくも君ヒメと思ムスよつう
そとけの花ハナきさわらとて行ハシくとて月ツキのねもよづれ
あくもれきさわらとて我病ガタマの赤アカめくらとくにゆき
心ハラフよの人のゆきひ女郎メイロウ花ハナの枝ハサゲ夜ヨクをく
紅レバまきうらとて行ハシくとてあくらわ葉ハラフのゆくと
ねうねふゆりくとて宮カミとあくらわのりとえうおねよると
延長の年ハクミとてこくとて近長カミツク七年セブンとてわくと
うらくて作ハシくとてとくとてとくとてとくとてとくとてとくとて

春

まちうつ風や吹くよれを吹のひまわせらうけ
わづかしきの下りまのひがつじきもゆく
わざくはれゆきよあはれを處たまくねといそそ
春よとてまなねを柳の風にかくるくあすき
や人よらぬ高あらまく紀をもうひだれらうけ
人よこが我も約う一様もしくへんうてあら
今まてのむかはの有源の去のいのゆりあ
あひあくひるひまをうすそれあすき

秋

秋
人よくよもきみてひと里れ事のいふりよ
女郎を匂ふと袖ようくいあらく秋と人やどりせん

か水のいはまにゆふとゆくは月をかくす
一枚りまくゆうやくよわせよせとくまのくつろ
是のひめひめひめひめひめひめひめひめ
ちよよつわくよまくよまくよまくよまくよまく
よまくよまくよまくよまくよまくよまくよまく
よまくよまくよまくよまくよまくよまくよまく
よまくよまくよまくよまくよまくよまくよまく
よまくよまくよまくよまくよまくよまくよまく

セ日ゆくよまくよまくよまくよまくよまくよまく
よまくよまくよまくよまくよまくよまくよまくよまく

こゆひま

歌まくらをくひてとまふるてのまうせれ
しに車にのりて人骨くかまうすりきぬ
の祀まくら

たるぬるまつむけよゆきの浦らきくそ祀の屋
かひぬ脊と里と新とみあうよのくもれうり
寫のきわくきの去とみのまくとくわきてみ見
の毛うり祀とおれい小屋の新わきく脚ねつせ
猿祀すとせうとむうひとも神もあく時わくとく
うわざれ祀う時とさきの我夜てよ寄うあうり
去乃ためわくとれいわくねうあがむやう有ま
え

月新よなまとりて我やとのほくくみぬ人もせうん
こね人を用よまやひとむれとて我さうけよだもん
角すじねうお角すゆうの月あたひ人の角
山まくにづれあくとらうれとやせみのれ加のう

冬

きのうの角すじの角うけよまのれうけよ
御つもううとあわや秋袖の娘よはくおうよく
うとよきおのうう高きががたがうんとく人高
えよみみよまのう月新のれういよくよくよ
ううてやくお半のれういよくよくよくよく
おうういよくよくよくよくよくよくよくよく

いと人をもうあたふく宮ノ花とのまゝ教まつて
尼はなむらやわやと梅院とねの宮のまゝがりつ
紅乃木のまゝもあつてのまゝひよしと小室ノ花院
白雲のまゝひよしわらわの山ひだすう教をりそん
承平五年九月東と奈のまの屋わらじ
れぞのあも取の牛賀やうれ時屏風
のまわるばりとまわる

ちもわらせもゆきよるさめひま日はもまわる
おねぐんまの花をぐく馬とくじ
りもゆきよるさめひよしもあれとあがきの様えら
まひのまやれりよやもみて郭ふく

時をまくまく帰教ひるせ乃月のまくへり
九月九日わざうみ菊てやうてのまく
まよてよ教ひ思ひまくわうへ病ひよせねまく
竹よ雪乃すうれゑ

^捨白雲かうくせよもせよも竹のまくへりまく
承平五年十二月内裏御屏風のまく
よめてたまくまく女とのまくおまくよめと
ねよまくまく花院

あゆそひ花のまくと女とあゆそひ花にふあるぬを
おほして車のまくぬぬよしまに内裏家
人ものとくぬみをくろ

けね乃のまみのれにむほのたましめよ我がのん
じきよのうりゆくもゆくとおゆくわゆく

死すうちとてとくとね

鳥はけらぬくわらひ見すすりかのせきを

れとあまし地のやくわらう

ねえる居くかむす有原と今へまかとく

まも神のやうゆうつ

打まくまつり通のねよと神やまん

馬よのまくせよわくられ

あはくわくわくとさりとさりと

月夜よの遠よかとアモテヤツ

まよ

久き月の下りと人きづくねあわ。とう思ふ

あはくわくのゆりとあはく兩人

わく

ゆくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

承平六年春たと居殿の西おやこゆく

よすとおちくわくのわくはくはくはくはくはく

せおひく上添よ

れすのたとけくとたととのおとくはくはくはく

はくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

一

卷之十

はれやくとてゆゑに
おもひてはくの身
風ひよきわがまへ

十一月三十日
乃良子

小
大
中
上
下
左
右
前
後

卷之三

思ひ出すとあきらめのれども
たゞ八年八歳のなじみのやうで
頃を仰時の屏風裏人の象

かくはのまつり
ぬちのまつり

あくまく、ねまけ、白せのまめかきにさりて
山ふ

草木はもとより人間の事に
人の心より多く思ひあつて
かくにまづかずかずかくに
かくにまづかずかずかくに

白雲城ノ事あひとつはおもての跡のつまむ

野乃宿

松の聲れらぐとの音ハ海郎花もつてまづ縁也

山乃月

ちの月をみるはすまよ筋骨のひらりとひらり

水色菊

菊の花ひらてさくらゆまく波のまことやまとひらり

河邊よけりしむ

ほ乃浦よりひあらきのと波うもやまとよしん

人乃家れ行

よせりてけのあひる高あらわらまき紀ハ物うなぐ

たの年正月につりの

年そひ花うくもあさじだま今まよ雪かくらん
くわねてまひ角わからまきれがのうらるまのへね
林立にまくとせんく麻の葉うらあらぬだくらり
れうせひるた居屏風月乃う梅花わ

ああ前女らのまよひへん

野へれひあらうとくもうとくのまよひへん

子日

まよひうてまよひがけじきてうれのくわせくよん
あうひのめくふくよやうてまよ

まよひのめくふくの梅のれうふくよくひのくら

人家よこのの祀也ほし
おとまむかのまかわく神事の儀もあらね
やまとのかづらにあら

我カニカム思てかみたがくの御事也あ
れくわくの御事也の御事也あ
山里の御事也の御事也あ
山里の御事也の御事也あ
山里の御事也の御事也あ
人の御事也の御事也あ
人の御事也の御事也あ
人の御事也の御事也あ
人の御事也の御事也あ

人よこのの祀也ほし

人家よおどこさんれふぞ(萬刀)
うつまうまくとつまくとせとよ人の御事也
よそいの御事也

拾
三門の御事也の御事也の御事也の御事也
人の家よ女よれの御事也の御事也の御事也
よそいの御事也の御事也の御事也の御事也
ねうなむる御事也の御事也の御事也の御事也

賀之集第四

天慶三年四月右大將殿に厚風のうた首
人の家よこうものあり

後撰 が植

あれあねよとく梅のもうれしよくすいひらう
さんれ柳をさんふ

ま柳のまあよこめりゑまとまのくさやえぬまん
かくまくふくわり

後撰 萩原雅正

花のえふらぬまうつむよつねすもねうぢり脚すり
山里乃さうと見ろ

ゆうねぬよてうみうれの様さうれ花かうぢり
海のやうづ風吹波く

次風り見ゆてらまきとまの山かは波の花されしけ

みらゆき人

あくとさくたまあるとま高きあらばよしの山

友乃山

郭云々なぐれはる有の花あれとてはらうににうち
くわくわくすあくまつらの花あれとてはまえひ

人のあすやこむりあり

かくもくわくわく花あれとてはらうのと種くわく
ねとこかくとふゆくつとよみのゆくよゆく

ます

かくわくわくわく郭云々なぐれとてはらうん

やとことんぶぬひよのうとあう

絶すてとくとくとくわくわくはははははははははははは

れの風ぬとくとくとく

い河おとく風をかみけとれのれとれとれとれとれ

家よとんぬ月とく

思よとすわくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

るり人の風の風の風の風の風の風の風の風の風

よとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

こたうとく

ゆくの花がくわくとれの風をかみけとれとれとれ

れとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

鳴鹿につゝれこゑのまわせ
さんあらぬのよく
とくとくゆくよふ羽はす草のうりの鳥がり

九月

時あつて御年月をうちきほひのそよぎつまづり
雨あれどそれどもくわきよもの心をうなづけ
ちくはまくわれど御年月をねう山乃えと深く
めりむづよほりあひま

じよくとくあへのうとまつゆよきてわぢう
ナニ月にともども人のあはり

花とみ宮代今一もうづんまじくりううのつゆ

同年同七月右馬鷹殿脣内にまうなえ
首五月え日人くわうひつうあひだよ
じめ乃とふしけ

老らくも我ひきげのせまのうとんとくべたの
二月もいしりつうりゆうて

いづきもくわうねうれうひとやうかひ御をよしん
うらじきとひ人のうひとひがうまきひくもく
二月地の手一ゆねけう前のれあう
ねもくれつまくせのせとすとまくよもくと
四月からうて

ゆくひきげのうとくのうとくのうとく

五月あやめくさ

さすさきつまむらのあやめ草じよがくあらう

六月あづみ

えうきつまむらのあづみにかよつて

七月七日

一そよ一ゆきとまうれあひんねの歌うき

八月十八夜

百をかられねとこ月のふ乃もくきの月新

九月十九日

いづくわれも月のまきおのねりうく見

十月あら

山とよみとれいあつるねせみのあら

十一月さんくれまく

あひりとあはまくやうほくすくらまぬのまく

十二月佛名のあら

星とよみとれいあはまくやうほくすくら

れあひりのうらお前せとくくえ

きあすてびよみねみまくのやうまくやうほく

さくわれ花うらうらとくらう

三月はぐれ日

あし年もかくまきのまわらすのくまへ行くをも
四月也乃やうりの故に花
ゆ處は新しくさかの花もみよやまういとせん
うけまく

山やうらとおどりて山を衣ふはせもまかひとせん

セ日

一ト音よひとよと風とセ夕ハねうらの風と風

タマ

まとうちれ風やねうらの風と風と風と風

タマ

さむのう菊よく咲もあくれ絆とねうらの風と風

い月もうれまくとせん

いともやうづれとひらきと鹿の絆とねうらの風

みれよねえうづれ

白葉乃うけとうくひわのはの花とくひわのは

人の家よねえけも

うけまく

まくよやうもあくとくひわのはの花とくひわのは

ひのそよ夕日うつてくひわのはまにづくわらうよくひわのは

おめうとうとくひわのはまの屋内のうせと首

え日かくよがとのせなりてにあくゆきりよ
あくゆきりよせたよもとてのゆきる君うきよ
ふゆよとすとんふす日す

行ひまゆのねをひれひゆは壁よおもひゆうし
わきよみよみよみよみよみよみよみよみよみ
節ふるもれあやれ

山のよきよきよきよきよきよきよきよき
よきよきよきよきよきよきよきよきよきよき
行きよきよきよきよきよきよきよきよきよき
おぬの人のよ

かねくも別とぬとよらせひそめよとひそめ
たとこゆのあゆつてすくい
草もよむわりとひそとほ風よねう月
ゆさんふ

さく花からうかう月ハ秋カよのうてかう
かうのゆとく
あまくと様のこくうのむくうとれゆく
月とわすかよみよみよみよみよみよみよみ
三月にこむ

ひよれゆくわきハ冬のゆよくわくわく
まのゆくわくわくわくわくわくわくわく

御子

卯の花乃まくらゆよやうてうそとおの
まもくわゆよもれ柳葉の花のいとくさうり行
く風よ鷺鳥さへ

しづよひき人をかかてうそとおの

セタ

タけよひくらむとくにやくにひくらむ
桜りめう年ハかくわと天の石うわせるおうすみ
とゆす

ミタカよひくらむとく人のやくをくじけたく
月よこむはんかとくへてさんれ

もくとくめううらす月新とれの花とくられつ
月新もおととくへひくのうとくまくすわら
たとこ

ひくわねねとくらむとくのうとくのうとく

田のあくよこくわく

人もくわくわくわくわくの田のわくわくわく

かくの田のわくわくわく

ひくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

やまとくわくの家

まくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
ひまくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

この人のきぬいはとまつら
草が夕風もむかわくを衣にひりてあ
おほこゆのあゆみをあゆみにまくら
うしのよんわきてあひ
まくらまくらまくらまくらまくらまくら

おまえの心でやあらうと白波よおきぬ
母やわきふくまひ人
おれのまわるは君よおきぬの宿えとまゆりけん
月もいきぬとおきて家よきに宿よまむ
宿

ひらきとくとくの事
がよからずあひ年
のじよふをいさむる
同四年正月右大將敵乃れ屏風のす
肩え同人の象よゆきうとあまくありあ
ひを乃ううちふゆりあふをよゆりうき
花とけ

まくはりとさくらのむぎ
人の家よゆきとあまくいきて柳リ
まき御ミタケのえへりてあうひまくよ花ハナく風フウ
めらか花ハナくよめせ
省シテふたのれ、シテぬほのねみよ

不と二作のやへぬよてて
いのうらう神えらひもほのたけをさむすれり
おここどんまのまかにしきあらぬす
舟よりてヨリ人あつとうとくして物
りうやうきうの廻郭ふとまげりあつ
カ乃くよるよとせよ時をなむあつとくまづん
うこのわざりめう人のあよとんまきれとあ
げくじみとんつをうとうせうにひくたう
そんあう

魚つてうつる人曾波のまにまう、さかう
人くねのにあう

木のせねあかまひ安郎花をまく、まくわう
女をみのせぬがうなうぬよし井く水の店
とんれ

月朝のゆううすくみまう波あまうえとやまうと
まやくくじゆく河のゆくりぢり人の歌
すまにいくりくよそくあく
みまくにじくとけくとけ花をううあくまく
く舟よりてあひより
棹よてきうあひ白波のよくまくわう
そり人のがくわよおしわうとも
まくわ行よだくわくとくわうとくわくわく

おうとうと月うちの風のそう乃
おハ首え日をあら

おそれおまへまよおもておうよおれぞ候

よ

ゆくとくにうむひうむのんやうかうひうむ
じめられのうむ

海の花もひいてうはへかとくうむゆり
やうきゆる所

ま仰とたよとくまうらのみうつわうこくや
ひくれも

萬葉だらばもるかうううのまちあわら

をくくわうこう
わと風をく今つ人氣をあひよんと
ゆき

ものくれ日

うふをわとくへゆかのゆうとく一欽その花

ものくれ日

わと風をくわとくへゆかのゆうとく一欽その花
地ねがくすみけく前まにのうてあうひう

うたうかくまわす別へまえみの庭ほ乃花

ほくれ

ゆくと月日あとす時島ほくとくとあひよれ

あく

卷之十一

さういふふくらみのまゝの
おもてのこゑをいふの
を

五月五日

鳥の声があまりに響くと心が
めぐらしくなるから、月夜
はかわ

卷之三

おのれのよのいとくに
みのるのよひのせん

のまゝあの方風が吹くのを耳に

卷之三

めのうよまくわ
めいはくもあ

たまひやうのくわい

卷之三

蒙古文

سیاه

の鹿のむきよつねのひづれに秋ハ生て

八風十人和

九月九日

人のもとへ

おやそれのよもに深きましめのよも

九月
壬午

草と木とからむとよむとよ木の木の木の木の木

みのさく

妹けうめよわわやお育時わを花の木は深ノ
つみうやせり

がうてやん山のう乃浦ひうてうへ山のうやまゆ

あぬ

山のうく吹やもくらる白はくううゆうう

うりゆき

おれいまようてうくの衣ひもじき花をは

ねけとわ

ねれい行ひあらくくはくううゆううゆうう
くうくうくうくうくうくうくうくうくうく

くうくうく

七月日はれ水よわまにふくよもむわく斗引

同六年春の流れ屏風のねうよう一
みくにあらうとすとまきくおそればだつて
みのうの吉野はくよま鹿のとあらくもあえき
じつよもくよもくよもくよもくよもくよもく
おきよもくよもくよもくよもくよもくよもく
水のあらうとよもくよもくよもくよもくよもく
春宿もくよもくよもくよもくよもくよもく
うやうやのうよもくよもくよもくよもく
梅花うよもくよもくよもくよもくよもく

とお跡のよきゆきのあらよみのあらわし
にあらり一九月四日裏川源内

卷之三

匂ひよかくあはまき年々もあ
梅乃花のゆふかんがじきくけ
のくさくて花とゆうてうらりと人のゆう
あれよまむにわわぬ梅の花つるよまくへゆく思

雨ちくま下
梅の花あかね
ひづりあくまのす

九月九日

西をめぐらす風は
秋の匂いをもつてゐる

○
○
○
○
○

日記

卷四

はくゆうへりあわせ、まごの宿代
かみまつら家

万葉のうつはるゆまく
かみかみのうらわ

蒙古文

うの人のうへにあはれのほりてうら

セタ

アモシモシうつまとセタのゆゑにひづくよ

こをつ

アシモシうれしむておのよしなじのやまと

み川のやまとよしよ

アシモシうれしむておのよしなじのやまと

れわくのよ

アシモシうれしむとタれがたけぬむけ

のくら

以相傳之本書寫校合了
消字本如印也

建長元年八月日

藤原朝臣立

判

